
アベルー旅立ちの日にー

コウミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アベル―旅立ちの日に―

【Nコード】

N3618N

【作者名】

コウミ

【あらすじ】

騎士を目指し宮廷の騎士団に志願することを決めたアベル。いよいよ出発の日の朝が訪れた。

旅立ちの朝が訪れた。

アベルは上掛けにくるまったまま、寝台の上で一つ寝返りを打った。

夜明けの頃合いにはとうに目を覚ましていたし、そろそろ起きなければならぬのは分かっていたが、今日これからの事を考え、思いにふけらずにはいられなかった。

アベルはしばらくの間、じっと横になっていた。

いよいよだ――。

いよいよ今日、宮廷で行われる一般謁見に向かう。そして剣士の位を取るために騎士団への入団を志願する――。

アベルはふと窓を見上げた。

窓から窺える景色は朝もやに包まれ、空もまだ白く薄いベールを纏ったように霞んでいた。

だがそれもやがては晴れ、眩しいほどの陽射しが差し込むだろう。旅立ちの日にはふさわしく、歓喜に満ちたすがすがしい朝だ。

「アベル！　いつまで寝ているつもりなの？　早く起きなさい」

階下からかん高い声が響いてきた。姉のリリーだ。

アベルは意を決したように寝床から飛び出し、素早く寝間着を脱ぎ捨てると、洗いたての衣服に袖を通した。

「顔はちゃんと洗った？　身じたくは済んでいるの？　今日は大切な日なのよ」

リリーは、朝の挨拶もそこそこにてきぱきと言った。

はたから見たら何気ない普段の朝の光景ではあったが、気忙しそうにする姉の言葉の端々には緊張感が漂っていた。

家族を宮廷に送り出すのは、栄誉なことであると同時に日常茶飯

事の出来事ではないのだ。

「荷づくりは完全？ 忘れ物のないようにね。荷物をこちらから送るのは大変なんだから」

「昨日から何度も言ってるじゃないか。支度はもうとつくに出来るよ」

リリーからスーパの器を受け取ると、アベルは不服そうに答えた。

「そう？ ならいいけど」

リリーは肩をすくめながら桶を手牛舎へと向かって行った。アベルは堅焼きパンとベーコンにかじりついた。

今日は特別な日には違いなかったが、それでも家畜の世話や畑仕事など日常の仕事に休みはない。

折しも今の時期、芋の植え付けの最盛期だ。

「マックスに手伝いに来てもらうから畑の方は大丈夫よ。それより、自分の事に気を使いなさい」

乳搾りを終えたリリーが、櫛を持ち出した。

「自分でやるよ——それより、父さんは？」

第一印象が大切だからと櫛で髪の毛をとかしつけようとする姉の手をかわしながらアベルが父の居所をたずねた。

「馬を繋ぎに納屋へ行ったわ。今ごろは荷車の支度も済んでるはずよ。ああ——アベル、お願い。もたもたしないで」

もたもたなんてしてるもんか——。

アベルは心の中で反論した。

姉さんはいっだって僕を子ども扱いするんだから——。

アベルは、亡くなった母親に代わり、これまで自分の面倒をみてくれた姉には感謝していたが、何かにつけて口うるさいところには少々うんざりもしていた。

「しっかりね」

アベルがいよいよ出発するという頃、リリーが感極まった様子で弟を見つめた。

「あなたなら大丈夫。立派な騎士になれるわ」

アベルは心がちくりと痛んだ。そして先ほどの姉に対し、少し腹立たしく思った事を悔いた。

「カインに会ったら手紙を書くように言ってちょうだい。あの子ったらこっちからいくら手紙を送っても返事ひとつよこさないんだから」

リリーがため息まじりに言った。アベルは小さく頷いた。

カインは三年前、同じく騎士に志願すると言って家を出て行ったアベルの兄だ。無事に騎士団に入ったという便りが届いたきり、何の音沙汰もない。

がたがたと車輪の音を響かながら一台の荷車が家の正面に横付けされた。

御者席に納まっているのはアベルの父親、ゴードンだ。

ゴードンは詰め襟の一張羅をいかにも窮屈そう着込み、見るからによそゆきの恰好だった。

普段の無精髭はこざっぱりと剃られ、頭髪には整髪油がたっぷり塗りとまれている。その様子はまるで別人のようだ。

ただの付き添いなんだから、そんなにめかしこまなくてもいいのに――と、アベルは思った。

きつと謁見での印象は相当大切な事なのだろう。

アベルは父の姿をしげしげと眺めながら荷台に荷物を積み終えた。
「元気でね」

「うん。姉さんも。しばらく大変だろうけど……」

兄に続いて自分までが家を出てしまうと、男手が二人も無くなってしまうことになる。アベルは今さらながら後悔にも似た複雑な気持ちだった。

「それはもう言いっこなしって何度も言ったでしょ？」

「うん……。姉さん、また結婚が遅れちゃうね――」

リリーの頬がさっと紅潮した。

「もう！ ナマ言って！ ……？ あら、アベル。あなたこそ――」

姉に促され振り返ると、家の際にある林檎の木の下にジョゼフィーヌが立っていた。

リリーが急にお弁当を包み忘れていた事に気がつき、そそくさと家の中へ取って返した。

アベルは大急ぎで、木の下に佇むジョゼフィーヌの傍らに駆け寄った。

「忙しい時にごめんなさい……。どうしても渡したいものがあって」
ジョゼフィーヌは遠慮がちに一つの包みを差し出した。

包み中は――手製のシャツだ。

「着るものは何枚あってもいいだろうと思って。型紙はダイアナさんから借りたの。でも、初めて縫ったから……すぐ下手なのよ！袖とか襟のことか、もうめちゃくちゃ。だから……」

「そんなことないよ。最高だ。ありがとう」

アベルの言葉を聞くと、ジョゼフィーヌははにかみながらも嬉しそうにほほえんだ。

「手紙、書くよ。羊皮紙は余計に鞆に入れておいたんだ」

ジョゼフィーヌは視線を落としたままこくりと小さく頷いた。

「私、もう行かなきゃ。朝の片付けの途中だし。お母さんにはすぐに戻るからって言って出てきたの」

「待って。ジョー」

アベルは行こうとするジョゼフィーヌを引き止めた。

ちらりと荷車の方に目をやり、父親が畑の方角を眺めているのを認めるとジョゼフィーヌは林檎の木の向こう側にいざなった。

アベルが照れくさそうに小声でひと言ふた言呟くと、ジョゼフィーヌの顔は熟れた林檎のように真っ赤になった。

ジョゼフィーヌはゆっくりと頷いたものの、すぐに大きくかぶりを振った。困り果てたように両の手を揉みしだき、顔は今にも泣きだしそうだった。

「だめ。だって、私……初めてだもの。どうしたらいいのか分から

ないわ」

「え……っと。そうだな」

実際、アベル自身も戸惑っていた。

まさか出発前の慌ただしいタイミングに、こんなことを聞くなんて――。

こみ上げるどきまぎを押し隠しながら、アベルはありったけの勇気を振り絞った。

「め、目をつむっていれば……いいんだよ。きっと――うん。そう
だ。目を閉じて」

ジョゼフィーヌの瞼が閉じられた。アベルの心臓がさらに高鳴り、その音が耳元にまで届いた。

アベルは軽く目まいを起こしそうになりながらも、眉根をきゅつと寄せているジョゼフィーヌの様子があまりにもいじらしかったので、愛しさで胸が一杯になった。

ジョゼフィーヌの肩は小さく震えていた。

アベルも緊張のあまり今にも手が震えだしそうだったが、ようやくジョゼフィーヌの顔にかかる髪を指で払い、その頬にそっと唇を重ねた。

父と息子を乗せた荷車が動き出した。

ゴードンが手綱さばくと馬は徐々に速度を上げ、二人を乗せた荷車は車体をがたと揺らしながら遂に家の前を離れていった。

助手席に座ったアベルが振り返ると、リリーが手を振っているのが目に入った。アベルは小さく手を振り、それに応えた。

ジョゼフィーヌは――あれから切なそうな様子で「さよなら」を言ったあと、家へと続く小路を駆けて行った。

「若いつてのは、いいことだ。青春だな」

ゴードンが何やら意味ありげに独りごちた。

「父さんは年がら年中青春してるじゃないか」

アベルが低くぼやくように言ったが、ゴードンは聞こえないフリ

をした。

「しかし、ジョゼフィーヌちゃんはいいい子だなあ。アベル、泣かすんじゃないぞ」

「父さんとは違うよ」

「何を言うか。俺は母さんを泣かしたことなんてなかったぞ」

(……どうだか)

アベルには、幼いころに亡くなった母については記憶はおろか、思い出すらなかった。だから、母のことは父や姉の思い出話に耳を傾けるしかなかった。

(母さん——か。どんな人だったんだろう)

アベルは母への想いに浸りながらしばらくの間、黙ったまま荷車に揺られていた。

目の前には一本のまっすぐな道が伸びていた。

四方は山と森に囲まれ、のどかな田舎の風景がいつでも続いている。

荷車が走る街道沿いには畑が拡がり、その向こう側の所々に民家が建ち並んでいた。

その内の一軒から大きな鞆を提げた人影が現れた。

足早に街道に向かって歩いているのは——？

アベルは目をこらした。

(パティ?)

アベルの幼なじみのパティは大きく手を振りながら、荷車に追いつこうと駆け足になっていた。

「おじさあん！ 待って！ とまって！ とまってえ！！」

ゴードンが手綱をぐいと引くと荷車の速度がぐんと落ちた。馬は数歩足踏みをしたのち、停車した。

「パティちゃん。おじさんはないだろう？ おじさんはさあ」

「ごめーん。じゃ、ゴードンさん」

パティがにっこりと屈託のない笑顔を浮かべた。

「パティ、こんな朝からどこに行くの？ それに、その荷物は？」

「宮廷に行くのよ。今日は大公の一般謁見の日でしょう？ 私、騎士に志願するの」

「な——なんだって!？」

アベルは驚きのあまり、とんきょうな声をあげた。

「だって——君、君は、女の子じゃないか！」

「男とか女とか、関係ないないのっ！」

パティは今度はゴードンに向かって目くばせすると、鞆を荷台に押し上げた。

「そういうことだから、乗せてね。ゴードンさん。あ！ 私は荷台で十分だから」

荷車が再び動き出した。

パティはどこで仕入れたのか宮廷の情報をあれこれ知っていた。

「騎士であり月の騎士団の総帥でもあるハーティ様。すごいよ！」

絶世の美女だって噂なんだよ！ 麗しいそのお姿、一度でいいから見てみたいなあ——。そうそう。騎士に志願するには宮廷の騎士団に欠員があるかどうかが問題らしいの。ヤニック隊長率いる『竜の口髭騎士団』からは見習いの募集があるらしいって聞いたわ。早い者勝ちか、入団試験があるかどっちかだと思っただけど——」

「そうかあ。パティちゃんは騎士になるのか……しばらくお手製のかぼちゃパイを食べさせて貰えないのはちょっと悲しいなあ。でも、パティちゃんが選んだ道なら仕方ないか」

「さすがはゴードンさん！ パティの気持ちよく分かってくれるねっ」

パティはいかにも嬉しそうにゴードンの腕に絡みついた。しかし、アベルは相変わらず譲る気持ちにはなかった。

「でも、女の子は家をまもって、料理とかお裁縫をしているのが一番だよ」

「あら！」

パティは心外だといわんばかりに眉を吊り上げ、これ見よがしにアベルににじり寄った。

「アベル？ あの時のことをお忘れかしら？」

パティは、かつて二人が幼かった頃——木の棒を剣に見立て、剣術の真似ごとをしていた時のことを持ち出した。

アベルは度々パティの振るう木の棒でこてんぱんにされ、家に駆け戻っては姉のリリーに泣きついていたのだ。

ゴードンが笑いをこらえるように咳払いをした。

アベルはむつつりと口を閉ざし、不機嫌にぷいと横を向いた。

（そんな昔のこと持ち出さなくても——！）

アベルはそれきり黙りこくった。

街へと向かう道すがらゴードンとパティの他愛のないお喋りが続いていた。

村で起こった出来事——柵を抜け出してはカラス麦を食い荒らす困った子牛のことや、とんでもない色に塗り間違えられた集会所の外壁のこと。

そして、子どもだった頃の懐かしい思い出話——。

「この川で……よく魚を釣ったよね」

荷車が小川に架かる橋を渡り始めた時、パティは懐かしそうに呟いた。

アベルは兄のカインに連れられて、よく川で魚釣りをした。その時には必ずとっていいほどパティもついて来た。

三人は小川で川魚を釣ったり、林檎の木によじ登って林檎をくすねたり、幼い頃からよく遊んでいた。

そういえば、カインはパティに決して虫食いの林檎を手渡さなかったな——。

頬杖をつきながらぼんやりと二人のやり取りを聴いていたアベルが思いついたようにおもてを上げた。

もしかしたら——？

荷車がやがて城門と城壁に囲まれた街へと入って行った。舗装された道には大きな石が敷きつけられている。

車輪はがらがらと小気味よい音を立てながら進んでいった。

「見えてきた！ 宮廷の門だよ！」

「パティ」

アベルは荷台からひらりと飛び降りたパティに声をかけた。

「ん？ なに？」

「君が……騎士に志願する理由^{わけ}って、もしかして――？」

一瞬、パティの顔に驚きと戸惑いの入り混じったような複雑な表情が浮かんだが、すぐにいつもの明るい笑顔が戻った。

「鋭いねアベル。でも、お喋りはここまで。早くしないと締め切れちゃうよ！」

アベルの問いには答えずパティは鞆をしっかりと携えると、くると踵を返し駆け出した。アベルは宮殿の門へと向かうその後ろ姿を見送った。

「時間が迫っているぞ。アベル、もう行け」

ゴードンは懷中時計に目を落としながら促したが、馬車から降りる気配はなかった。門前には謁見希望者が列を成し始めている。

「父さんは？」

アベルは、父も付き添いで謁見の場に来るものだとばかり思っていた。

「いや。俺はここまでだ。親がこのこ謁見にまでついて行ってみろ。志願者はまだ親離れしていないと見なされて、かえって印象が悪い。カインの時にも一人で行かせた」

「でも……その恰好は？」

「ああ。せっかくリリーが背広にアイロンをかけてくれたり、髪もこうして丁寧^{むげ}に撫でつけてくれたもんだから……無下^{むげ}にもできなかったよ」

ゴードンは少し照れたような笑みをもらした。

アベルはさりげない父の優しさに、胸が熱くなった。

「それじゃ、父さん」

「おう。頑張れよ」

父の激励に一礼して応え、アベルはまっすぐ前を見据えた。
宮廷への門は目の前だ。

アベルはひと呼吸おいたあと、背筋を伸ばした。
そして――。

アベルは旅立ちの第一歩を踏み出した。

(後書き)

読んでくださってありがとうございます。

こちらの作品は某SNS日記のお楽しみ企画として書かせていただきました。

伏線ありまくりで、いかにも『つづく』という感じですが、読みきりです。

続きはありませんが、同じ設定でアベルが登場する別のお話を執筆する目論みがあります。

なので伏線の回収はその時にさせていたかどうかと思っています。
(やっぱり投げっぱなしはいけませんからね)

今まで二次創作ばかりでしたので、初のオリジナル!?

読みきりなので流れがやや強引ではありますが; 楽しく書かせていただきました^^

コウミ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3618n/>

アベルー旅立ちの日に一

2011年7月3日03時37分発行